

# 日本記者クラブ会報

第206号  
1987年  
4月10日発行

東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一  
日本プレスセンタービル 100  
◎ 社団法人 日本記者クラブ  
電話 五〇三二七二二(代)

## 六十一年度予算決まる

### 年額二億九、八二〇万円 第29回 総会

日本記者クラブの新年度（昭和六十二年四月～六十三年三月）事業計画および収支予算が総務委員会、理事会の審議を経たのち、三月二十三日の臨時総会で正式に決定した。事業計画は、前年度の事業計画の柱となっていたスペースの拡大が実現をみたため、これをはずした。その他の表現を一部改めただけで、ほ

ぼ従来の活動方針を踏襲している。

収支予算は年額二億九、八二〇万円、前年度比五・七四%増。ただし、前年度は臨時収入の形で処理したプレスセンターからの保証金戻り分を、新年度からは予算化することにしたため、これを考慮に入れると実質〇・九八%増となる。

この保証金戻り分は、昭和五十一年のプレスセンター入居にさいし預託した保証金が、契約の十年間を経過したため、六十一年以降十年間にわたり十分の一ずつ、利息が付いて戻ってくるというもので、こんどはその二年目。この戻り分は、スペース拡大に伴って増える借室料に充当することが、六十一年五月の理事会で決定されている。

収支予算の詳細についてはページをご覧ください。収入の約八割が会費収入、支出の五割以上が借室維持費、というのがクラブ財政の基本構造である。

このことに関連し、現行の貸室制度などを見直して増収をはかっている、との意見が審議の過程で出され、今後の課題として施設運営委員会を中心に検討することになった。

とりあえずの増収案として、貸室利用の効率化がある。九階の宴会場（八十人）や大会議室（三十人）、小会議室（二十人）は割によく利用されているが、会見室（八十人）は事務局の対応しだいでもう少し利用していただけるかもしれない。

問題はむしろ、せっかく増設した八階の貸室であろう。ここにはインタビューや座談会に適当な応接会議室（六人）と、小人数の会食や研究会向きの第一会議室（十二人）、第二会議室（十四人）がある。

大いに活用しておいで。の会員も少なくないが、まだ知らない方もいる。いはおられるかもしれない。この機会にPRさせていだけ。カッコ内は適正収容人数）

さて、昼食会、記者会見、研究会など、クラブ行事は三月もなかなか盛んだった。政局がらみでは公明党の矢野委員長や民社党の塚本委員長を、財界からは日経連の大槻会長を、昼食会に招いた。外国の要人ではレモン外相、ジンダーマン東独人民議会議長、コナブル世銀総裁などの記者会見のほか、変わったところでは「伊丹十三氏を囲む会」を行い、いずれも盛会だった。

終わりに、五月総会の記念講演をお願いした丸谷才一（まるや・さいいち）氏のご紹介を。大正十四年生まれ、山形県出身、東大英文卒、作家・評論家。小説『裏声で歌へ君が代』など著書、訳書、評論多数、芥川賞をはじめ数々の賞を受け、日本文芸家協会理事。

こんどの記念講演には『古代習俗と現代人』というテーマを用意していただいている。乞う、ご期待。

（事務局長 下田進一）

この日も  
それぞれ  
わがわが  
あつて笑く  
伊丹十三

伊丹十三氏の記念署名  
（関連記事3ページ）

昭和62年度予算

自 昭和62年4月1日  
至 昭和63年3月31日

第29回総会

(昭和62年3月23日(月)  
日本記者クラブ宴会場)

社団法人日本記者クラブ第二十九回総会は、三月二十三日午後三時からクラブ宴会場で行われた。出席法人会員二四社、委任法人会員一三社、計一三七社の出席をもって成立(定足数七三社)、新井明理事長を議長に選び、議事を進めた。

昭和六十二年度事業計画ならびに同収支予算を原案どおり全員一致で可決した後、左記の役員の一部交代を承認した。

理事 東京放送(東守之↓大蔵雄之助↓志甫溥) 共  
同通信社(原寿雄↓犬養康彦) 北海道新聞社  
(池上忠行↓堀井順太郎)

科 目	月 額	年 額
支出の部	円	円
事業費	15,704,000	188,448,000
借室維持費	13,034,000	156,408,000
借室料	10,200,000	122,400,000
共益費	1,652,000	19,824,000
空調・光熱・水	1,182,000	14,184,000
会議費	190,000	2,280,000
事業運営費	1,050,000	12,600,000
会報発行費	830,000	9,960,000
運営雑費	130,000	1,560,000
通信費	170,000	2,040,000
印刷費	250,000	3,000,000
交通費	50,000	600,000
管理費	1,330,000	15,960,000
クラブ管理費	900,000	10,800,000
機器備品費	100,000	1,200,000
消耗品費	130,000	1,560,000
事務委託費	130,000	1,560,000
事務雑費	70,000	840,000
人件費	6,584,000	79,008,000
給与	3,724,000	44,688,000
賞与・諸手当	2,750,000	33,000,000
厚生費	110,000	1,320,000
諸積立金	400,000	4,800,000
資産準備積立金	350,000	4,200,000
退職積立金	50,000	600,000
予備費	832,000	9,984,000
計	24,850,000	298,200,000

科 目	月 額	年 額
収入の部	円	円
プレス会員会費	15,760,000	189,120,000
法人会員会費	10,016,000	120,192,000
個人会員A会費	2,276,000	27,312,000
〃 B 〃	169,000	2,028,000
〃 C 〃	1,036,000	12,432,000
〃 D 〃	2,263,000	27,156,000
賛助会員会費	4,011,000	48,132,000
法人賛助会員会費	3,080,000	36,960,000
個人 〃 〃	429,000	5,148,000
特別 〃 〃	502,000	6,024,000
小 計	19,771,000	237,252,000
貸室料	2,400,000	28,800,000
雑収入	2,679,000	32,148,000
特別収入	876,000	10,512,000
施設機器賃貸料	161,000	1,932,000
受取利息・その他	400,000	4,800,000
保証金戻り	1,242,000	14,904,000
計	24,850,000	298,200,000

ク ラ ブ ゲ ス ト

茂田 宏 外務省欧亜局ソ連課長



「ソ連課長から見た日ソ関係」のテーマで、昨年七月以降の動きをラウンド・アップし、今

後の方向についても言及した。当ゴルバチョフ書記長の訪日問題を軸に日ソ関係を動かしていく方針であるとし、「桜の咲く頃にはより正式な形で、この問題が日ソ双方によって取り上げられることになる」と。ただし訪日時期については「今度はソ連側からの希望を聞き、こちらから時期を示すことをしないで、ソ連のイニシアチブを待ちたい」。

ソ連の共産党中央委員会も終わり、米ソ関係も再調整へ動き出し、ソ連側からも再び書記長訪日の可能性が示されている。鹿取泰衛駐ソ大使も一月二四日から二月二〇日まで帰国し、官邸、外務省と協議、日本側も「仕切り直し」の準備完了。そうした時点での課長のブリーフィングだった。

「シエワルナゼ外相の東南アジア、豪州訪問からの帰国を待って、鹿取大使から日本側の考え方を伝える」と、この日示したシナリオ通り、

三月二一日両者は時間をかけて会談した。「三月五日(木) 研究会「ソ連—その変遷と意図」(X.M.) 司会 木村明生企画委員 出席 一〇一人」

行天 豊雄 大蔵省財務官

パリ合意から一〇日余りの時点でのブリーフィング。円は一五三円近辺で一応安定していた。オフ・ザ・レコードで、ブラザ合意からパリ合意までの推移を解説した。が、話は慎重そのもの。



パリ合意については、政治的に抑え込んだもので、一か月もすれば円高に動くとの観測も当初からちらほら。本当のこ

ろ財務官は胸の中で一五二、三円がどの程度続くと思っていたのだろうか。これは誰にも分からないし、また明かさない。が、円はパリ合意から一か月経った三月二五日、東京市場で一五〇円をあっさり割った。「三月五日(木) 研究会 司会 高野洋企画委員 出席 一〇七人」

ジャン・ベルナル・レモン仏外相

一九七八年以來問遠になっていた外相協議を再び定期化させたい、と三月七日来日した。

「フランスは、日本が世界的大国となることを歓迎する。その大国にふさわしい責任と義務を果たすことを期待する」

「フランスは自国のみならず欧州共同体の一員としても発言している」との冒頭あいさつ。第一質問は、来日前パリで行ったインタビューの中の発言——欧州に背を向けたままでは、日本は日米摩擦を解消し得ない——に関係したものの。答えは「いまとなって考えてみると、あなたは(質問者)の引用した言葉はあまりに簡単すぎた気もしないではない」「ECの人々が対日貿易赤字の拡大に懸念を持っていることを言いたかった。特にフランスは深刻で、八六年の対日赤字は二一〇億フランになる」。第二、第三問はゴルバチョフ書記長のINF分離交渉提案(2・28)に関するもの。なぜソ連は譲歩したのか? 仏外務省と大統領府で意見の相違があったのでは? これには「なぜレイキャビクでソ連がSDIとリンケージさせたのかと問題をたてるべきだ。西欧はソ連が前の立場にもどつてくると予測していた」「外務省は質問に答え見解を表明した。コミュニケーションをみればゼロオプションに反対していないことは明

白。その方針に沿って、私は閣議でも報告した」と。「三月九日(月) 記者会見 司会 友田錫企画委員 通訳 弥永康夫 出席 六八人」

伊丹 十三氏



「日本人はなんでこんなに不思議なんだ」。この問いかけが、伊丹映画の基本にあるようだ。「お母さんと赤ちゃんの



関係で、人間関係をやっている文化だ」と言う。抱擁力と自己犠牲の母親型と純真でかわいい気な赤ちゃん型の類型だけで、父親型不在(人間を超えた規範のない)の文化だとも言う。「民主主義を輸入してまだ百年ちょっと、諸制度もまだ借りもので、日本人の『尾骶骨』といふんな場面であつれきを起す。そこが興味深い」。最初の「お葬式」では、身内の死などで突然登場する、形が化化したムラのシキタリに首根っ子を無感動におさえられる現代人をユーモラスに描いた。次の「タンポポ」では、人間以上の規範を求めない人々の欲望肥大を食べ物やセックスの関係で描いた。そして、「マルサの女」では、価値観が生産性に一元化されている社会を照射した。「国税局の査察官を主人公にして、彼らにギューギューいわされている人たちの修羅場を連続的に並べて、日本人をオカネと

クラブゲスト

「いま興味あるのは「会社」だといふ。使ってみたい男優は山城新伍だ。そうだが、日本の女優には関心なし。「わがままな表現をするのだけがあうまで、ほかのことが何もできない」「当面、宮本信子（夫人）でいくし、かしょうがない」。三月三日（金）懇談会 司会 広瀬一郎 中川朝之助 阿企西委員 出席 六八人」

矢野 絢也 公明党委員長



「が、最初は抑え気味だったが次第にメートルが上がる。「中曽根さんは同日選の大勝利でノボセが目立つ」「これより最低最悪なものない、人知の及ぶ一番オソマツな案だ」と思う、デタラメな内容の売上税を出してきた」「表では中曽根さんの

「去年十二月の党大会で竹入氏からパトンを。委員長としては、この日がクラブ初登場。「行儀よく言葉も少な目にかわいらしい感じでやんなさいと、党内からもご注意いただいています」と。

横暴を止め、裏では自民内の不平、不満をあおり、売上税問題を政局、政変がらみにしていく。

統一地方選前半の投票日である四月十二日以降、売上税攻防の一つのフシ目がくるとし、「必殺の決め手を持っているので、「一〇〇%とは言わないが、それに近い確率で粉砕できる」と。

テクニクをたのしんでいるかのごとき誤解を与えかねない矢野氏に対し、ベテラン会員から、安保、ロッキード国会などの例を引いて次のような発言も。「議会の一日は大事なものです。いまの議会は人その辺がマヒしてはいないか」。三月七日（火） 昼食会 司会 藤村邦苗企画委員長 出席 一〇六人」

D・ディエンヌ ユネスコ事務局次長



ムボウ事務局長のスポークスマン役で、出身も同じセネガル。三月一六日、外務省の招きで来日した。

「ユネスコの危機は国連システム全体、マルチ・ラテラルな協力体制の危機としてとらえるべきだ」。国連で最初に危機にさらされたのは偶然でなく、ユネスコの複雑で困難な任務に関係している、と先制パンチ。「それぞれの価値観、文化的背景、アイデアがいろいろ絡

んで問題が出てくるので、ここでの仕事はよい意味でコントラパーションシャルでいい。チャレンジャブルであるべきだ。長い目でみて平和と文化に貢献していく組織だ」。

米、英、シンガポールに続く脱退もなく、予算も事業計画も全会一致で承認され、内部からの改革も進み、危機は脱したと報告。「三〇%の削減予算の中で八〇〇のポストをカットした」とも。

ムボウ事務局長の三選問題については、昨年一〇月六日の執行委員会で「I am not seeking 3rd mandate」と発言している」と。しかし、その前七月のOAU首脳会議でも、九月のアラブ外相会議でも、ムボウ氏の留任が求められている。

三月三日（月）記者会見 司会 石丸和人企画委員 通訳 佐藤敦子 出席 二〇人」

大槻 文平 日経連会長

明治三十六年生まれ、日本経済の先行きを憂えて、ともかく元氣だ。

「製造業は底入れをしたというが、底を這うような状態だ。不況は第三次産業にも影響していくのではないか」「米国経



済の実態が変わらない限り、円高、摩擦は続く」。今春闘は賃上げより雇用優先というわけだ。業績で賃金面の格差も多少は出るが、経営者は今年だけでなく近い将来にも責任を持ち、「悪いときは悪いように出す心がけが必要」と。

諸悪の根源は高い土地と生活物資にあるとし、住宅政策、土地税制、農業保護等の見直しを主張した。「高い住宅費と消費者物価の中で生活しているから、賃金も高くなり悪循環になる」とも。

売上税については「増減同額なんだからたいしたことじゃないのではないか。高齢化社会の社会保障に対応するためにいいのではないか。議論の中の修正ならともかく、国会で議論もしないで、一日一億円もかかるそうだが、そういうムダを平気でやっているのはたまらね」と述べ、「高額のカーネが流通にとられていて、その一番甘い汁を吸っているところが反対しているのだから、言いすぎましたかな」と思わず本音も。「三月五日（水） 昼食会 司会 鈴木幸夫企画委員 出席 八六人」

H・ジンダーマン 東独人民議会議長

衆院議長の招きで、三月二十三日、議員団の団長として来日した。

東ドイツ政府の「対話政策」を説明し、その第一テーマとして中距離核戦力（INF）の欧州からの撤去を、第二テーマ

クラブゲスト



として文化、スポーツ交流の拡大をあげた。

「INF撤去は核廃絶への第一歩。これだけでも大変な問題なのだから、短距離核や通常兵器の問題をからめるのは得策でない。短距離核はこの後で、その時には東独は最初撤去する用意がある」

「ソウル五輪にはもちろん参加する。一部の競技がピョンヤンで行われることが望ましいが、それを参加の条件にはしない」「前提条件はあるが、五輪参加が韓国との正常化のキッカケになればいいと思う」

時々、柔和な笑いを見せ、平和への努力と交流拡大をていねいに語り好感を与えたが、原則は固い。【三月二十五日(水) 記者会見 司会 佐野真金西委員 通訳 三島憲一 出席 三七人】

**バーバー・B・コナブル世界銀行総裁**  
昨年七月から総裁。約二〇年、米議会で活躍、政治的バランス感覚と親近感は十分とみた。

「途上国の経済成長は、開放通商



体制にかかっている。成長がなければ債務問題の解決もできない。この点でガット等での日本のリーダーシップを期待する」と冒頭発言を締めくくる。

質疑応答に入り、日本人記者が「米国は二国間援助に傾いているようだが」ときけば、「日本政府同様、米政府も複雑で、議会の一部にそういう声もあるが、ペーকার長官は強いコミットメントを与えてくれている。最大供出国としての米国の責任に満足している」。一方、米国人記者の「日本の累積赤字はOPECの時に違い、途上国へ還流せず富める国への投資にしか向かっていないが」には、「今後、途上国への投資が増えるだろう。世銀のような機関への融資が増えていることから、それを楽観している」と。

【三月二十六日(木) 記者会見 司会 有賀忍西委員 通訳 森田啓子 出席 四六人】

**塚本 三郎 民社党委員長**

前日(三〇日)、円は一四四円七〇銭の新高値をつけ、東京でもニューヨークでも株が大幅に急落した。



売上税反対で、中曽根内閣を土俵ぎわまで追いつめた野党だが、少なくとも民社には重荷になってきたやにみえる。「中曽根さんは死んでもやると言い、野党にはノック・アウトする力がない」。いまこそ賢者のタオルが必要だ」と、委員長自ら、自民長老あるいはニューリーダーの調停、方針転換に期待を表明する。切り札の一つといわれる野党議員総辞職戦術についても、党利党略と受けとられ、今の空気が逆転するかもしれないので判断に迷うところだ、と慎重だった。

「野党も国政を分かち合っているのだし、売上税だけが問題ではないでしょう。日米、円高の問題にテーマをしぼるなどして、国会で議論してはいいかなんですか」との、会員の提案には次のように答えた。

「今朝、大内書記長とそれを相談した。しかし、民社が自民の手助けをしたとか、野党の足並みを乱したと報道されるので、私の口からは申しあげな

った」【三月三十一日(火) 昼食会 司会 武藤忠全西委員 出席 八一人】

**首藤 信彦 東海大学助教授**



テーマは「日本企業の海外安全対策」。この研究会の翌朝、マニラから三井物産の若王子さん解放のニュースが入ってきた。ともあれまずはめでたし。

しかし、円高でこれまでまったく国際経験のない中小企業も生き残りをかけてドンドン海外へ向かい、未経験の派遣員が増える一方なので、事前の安全教育がますます重要性を増す。

植民地経営の過程で、ナショナリズムや国有化の嵐に見舞われ、悲痛な犠牲を払った欧米に比して、日本にはノウハウの蓄積が少ない。しかし、今や日本人が歩いていけば、札束に見られ、現地の人のほしいものはみんな「日本製」という時代、効率一辺倒から安全第一へ認識を変えなくてはならない。マニラやリマでの事件もあり、日本企業の「安全マニュアル」づくりは急速に進んだが、防弾自動車の利用はまだだし、誘拐保険の問題も残っている。【三月三十一日(火) 研究会 司会 阿部義止西委員 出席 四一人】

## とっておきの話

## 「沖縄返還」に取り組んだころ



## 岸田純之助

ホノルルの夏は暑かった。会議が終わって夕食までの時間を、私は毎日ホテルのプールサイドで過ごした。一九六七年六月、ハワイ大学東西センターで、ベトナム戦争、対中正常化、日米安保関係などを主題に「国際平和と安全」日米専門家会議が開かれたときのことである。

米側参加者の一人、ウィリアム・カウフマン教授も毎日プールに姿を見せた。

その日もそうだった。いつものように、彼はゆっくり、タートルで泳いだ。水にきれいにのっていった。やがて水から上がった。手を振る私の方にやってきた。となりの私に腰を下ろした。私たちの会話は、当日の会議で討議された「沖縄返還」の問題に移っていった。

会議の席上では、まずライシャワー教授が「一九七〇年までに沖縄の完全復帰について交渉すべきだ」「核を配備する問題は交渉可能」と述べた。カウフマン教授はこの見解に、真っ先に賛意を表した。発言が一巡した後で、核なしの返還は可能だ、ともつけ加えた。だから私は、カウフマン教授ともう一度、その話をしたいと思っていたのである。

昼の発言を簡単に繰り返した後、彼は、さらにこう言った。

「実は、国防総省で、沖縄返還についての検討が進んでいる」私のからだを、一瞬、衝撃が走った。

知日派のライシャワー教授の意見は、私たちにあって妥当なものである。だが、いまは政府で責任

の地位にいるわけではない。彼の考えはどの程度、米政府の中に基盤を持っているのか、その点について、手がかりを得たいというのが、私たちの関心事だった。国防長官顧問を務め、国防総省に太いパイプを持つカウフマン教授のこの言葉は、その意味で、私には決定的に重く響いた。

## 「沖縄基地問題研究会」に参加

朝日新聞社では、一九六五年七月、五年の時限を付けた「安全保障問題調査会」を発足させた。私もその一員となった。その翌八月、佐藤首相は、日本の首相としては第二次大戦後初めて、沖縄を訪問した。那覇空港で「沖縄の祖国復帰が実現しない限り、日本にとって、戦後が終わらない」とのスレートメントを発表した。それより前、一月の佐藤首相・ジョンソン米大統領の共同声明でも、沖縄返還への日本政府・国民の願望と

大統領のそれへの理解が記載されていた。当然のことながら、安保調査会の主題の一つに「沖縄返還」があげられた。

しかし安保調査会でのこの問題についての分析は、当初はなかなか収斂しなかった。一九六七年、上述のハワイでの会議が、方向感覚を明確にする契機となった。

ハワイから帰国して間もなく、末次一郎氏と会うことになった。沖縄復帰の課題に早くから取り組んできた同氏が、人を介して、会いたいと連絡してきたのである。話はこうだった。

「首相の諮問機関として『沖縄問題等懇談会(大浜信泉座長)』が発足する。秋に予定されている佐藤・ジョンソン会談で、沖縄問題についてさらに前進した合意のあることを期待している。しかし結局のところ、沖縄の基地の取り扱いは中心にした具体的な青写真づくりに専念する別の研究会が不可欠だ。それに参加して欲しい」

数日考えた末、承諾した。その年から私は、朝日新聞に新設され



「本土並み、1972年返還」報告を報じる朝日朝刊(1969年3月9日付)

た専門記者制度の第一号として、編集委員になっていた(安保調査会研究員を兼務)。この研究会への仲間入り、自由な記者活動の差し支えになることはないかという問題がある。だが所詮、独立性の確保は、自分自身のその都度の態度で決まるのだ、と割り切った。

「沖繩基地問題研究会(久住忠男座長)」は正式には一九六八年二月に発足した。メンバーは十四

名、考え方には相当幅広い違いのある人々だった。かなりの頻度(月平均二回)で研究会が開かれた。

ある程度審議の進んだ九月末、私は、返還の際の基地の態様にいて見極めをつけるため、沖繩に二週間ばかり出かけた。東京の米大使館経由で米軍に便宜供与を依頼し、朝早くから夕方まで毎日、方々の基地を見てまわった。希望を出していたが米軍に案内してもらえなかったメースB基地や、いくつかの情報・通信基地には、朝日新聞那覇支局の井川一久君が連れて行ってくれた。

基地調査も終わりに近づいたある夜、十一月十日の首席選挙に革新共闘の支援で立候補を予定している屋良朝苗氏と一緒に食事した。「基地研は沖繩返還にどんな態度で臨んでいるのか」という屋良氏のやや詰問調の問いに、その日まで調査に基づく私の感触を

述べた。「公然たる核配備のない状態、つまり核抜き返還は可能である。しかし、軍事基地の削減は、返還後も含む長い交渉に依らざるを得ない」。私の答えを聞く屋良氏の顔に、ほっと安堵の色が浮かんだように、私には思えた。

「核抜き本土並み」の報告起草

「基地研」のメンバーには、米政府・軍部に友人を持つ人が多かった。それらの人々は、米国の友人との非公式接触も精力的に行っていた。その成果の一つが、一九六九年一月下旬、米国軍部の最高指導者であった人たちが招いて京都国際会議場で開催された、沖繩問題に関する「日米京都会議」である。

その最終日、慎重な言いまわしながら、「本土並み」返還を示唆する議長報告が提示された。

米政府中枢部との非公式接触については、キッシンジャー氏が回顧録「ホワイトハウス時代」の第九章第三節「沖繩交渉」で触れている。彼は、「ヨシダ」の暗号名で呼ぶ「使者」とたえず連絡して

いたことを明らかにしている。

「日米京都会議」のあと、基地研は最終報告書の取りまとめにかかった。私が報告書を起草することになった。例の「ヨシダ」も強く私を推した。私もむしろ積極的に引き受けた。微妙な問題についての報告書作成では、起草者の文案が最後まで大きな重みを持つことを、これまでの経験で痛感していたからである。

三月八日、「核抜き、本土並み、一九七二年返還」を骨子とする報告書が、全委員の合意を得て発表された。この内容は、翌九日の新聞で詳しく報道された。

国会やマスコミで「政府の返還交渉の方針」を迫られるたび、頑固なほどに「まだ白紙」と言い続けてきた佐藤首相が、「核抜き、本土並み」と、交渉に臨む態度を鮮明に打ち出したのは、その翌日(十日)であった。

きしだ じゆんのすけ氏略歴 大正九年鳥取県倉吉市出身。東京大学工学部卒。昭和二十一年朝日新聞入社。編集委員、論説委員、調査研究室長、論説主幹を務める。六十年退社。現在、日本総合研究所会長。

# 売上税を追う

## ワーキングプレス

「金丸副総理が後藤田官房長官と一緒に総理大臣室に入って行ったのが見えた」

三月十六日の政府与党首脳会議のあと、出席者のひとりがこう漏らしたのが、金丸副総理の売上税修正発言のきっかけだった。

早速、金丸番記者が総理府の副総理室に押しかけると、副総理は「(官房長官に) このまま、ただおしんぐの気持ちだけでいいの

か。そういう問題は、どこでどうすればいいのか考えざるを得ない、と言ったんだ」と言う。シアパウと自称し、腹芸を得意とする金丸氏だけに、難解な金丸語だった。

番記者がさらにただと、「稲穂の精神だけでいいのか。耐えるだけでいいのか。日時だけが過ぎていくのが政治になるか、ということだ」と言う。なおさら、わからない。「もう少しチエを出していいではないか」「国民の言っていることにも謙虚に耳を傾けるべきだ」と補足した。

これで各紙が翌日朝刊で一斉に「金丸氏が売上税修正発言」と報

じたのである。しかし、政府与党は同月三日夜の緊急首脳会議で、予算審議、売上税問題では強硬方針を貫くことを確認していたことから、金丸発言のショックは大きかった。十七日夕には後藤田官房長官が「副総理に聞いたところ、売上税を意図したのではない、とのことだった」と、金丸氏に代わって異例の釈明をした。

### 難解な政治的発言の読み方

小林 静雄

相も「国民の理解を得られるよう努力していきたい」と修正をにおわせ、その夜の政府与党緊急首脳会議では再び「税制改革は既定方針通り進める」と確認した。

猫の目のように三転四転、読者ならずとも社内からも「わかりにくい」の声が上がった。金丸発言以来の一連の動きは、本音と建前の使い分け、修正発言は本音、既定方針の確認は建前である。これ

をわかりやすく読者に伝えることが、政治記者としての力量を試される場所でもあった。

そのためには、ふだんから情報量を多くし、政治家の言葉の裏に隠された本音部分を常に見抜いておく必要がある。それぞれの担当記者から誰が何を言っていたか報告を受け、その真意は、と意見交換、試行錯誤を繰り返して見通しを立てていかねばならない。

本音を聞き出すために、各記者は連日、夜討ち朝駆けである。それも単独で聞き出したい。し

かし、焦点の政治家は、本音をつかまれないと

午前様を決め込む。担当記者がコートの襟を立てて十二時、一時と粘ることもしばしば。たまに早く帰宅していても「もう寝ました」と、事実上の門前払いにあたりもする。そこは、社会部記者の夜回りと同様である。

三月十日夕、党三役らが行き先を秘密にしたまま車で出かけ、「極秘会談か」と色めき立った記者団とカーチェイスを演じた。わが社

も数人が追い駆けたが、ほとんどが巻かれ、ヤキモキしていたところに三十分後、「場所は〇〇」と某君から電話が入り、ポケットベルで再び全員に連絡をつけてホッとしたこともある。

売上税をめぐる自民党の動き、野党の態度は即政局である。四月十二日の統一地方選第一陣まで国会も政局も動かないといわれている。

だが、こうした表面静かな時に、政局への仕掛けがつけられる。かくて、夜討ち朝駆けは続く。



緊急首脳会議で「税制改革は既定方針通り進める」と決めたが…… (3.19) 写真 サンケイ新聞



# レーガン大統領とプレス

## ワーキングプレス

世界で最強の権力を握る米国の大統領を取材するホワイトハウス記者団は、世界で最も「しつこく」ある意味では最も「行儀の悪い」集団といえる。特にイラン・ニカラグア秘密工作事件が発覚した昨年十一月以来、この傾向が加速した。

ホワイトハウスでは毎日、スポーツスマンによる定例ブリーフィング（記者会見）のほか、大統領声明など多数の発表文書が出る。しかし、記者団はスポーツスマンの説明だけでは絶対満足しない。スポーツスマンが「大統領はこう考えている」と言うと、すかさず記者団からは「その件で大統領に直接聞いたのか」との質問が飛び出す。

記者側が「大統領の方針ないし決定」に最大の関心を払うのは、国務、国防などの長官がなにを発言しようが、政策の最終決断は大統領が下すからにほかならない。このため記者団は、大統領に直接、質問を浴びせる機会を常にうかがっている。大統領の公式会見はもちろん、大統領と訪米中の外

国元首との会談冒頭の代表取材などで、鋭い質問を投げかける。

「しつこさ」と「行儀の悪さ」の典型は、シャウティンク・クエスチョンに現れている。大統領が執務室から姿を現したり、土日休暇のためにホワイトハウスを飛び立つ直前に、記者団は「大声」で大統領に対し質問をぶつける。警備上の理由から大統領との距離は少なくとも十メートルはある。その

## 10メートル先から「大声」質問

松下文男

こうえ専用ヘリコプター「マリーン・ワン」のエンジン音が加われば、自然と「大声」になる。

質問ができる時間は、せいぜい十秒程度。質問は一つか二つに限られる。シャウティンク・クエスチョンには、記者側が最も知りたいたことが凝縮されているといっても過言ではない。昨年四月に訪米した中曽根首相とキャンブデビッドで会談を終え、専用ヘリでホ

ワイトハウスに戻ったレーガン大統領を待ち受ける記者団から質問が飛んだ。英語も得意でなく大声も出ない小生は島国根性から、首相との会談内容に関する質問を内心期待していた。実際は「大統領、リビアをいつ攻撃するつもりですか」。大統領は肩をすくめただけで、否定も肯定もせずホワイトハウス内に姿を消した。

日本の内需拡大公約も米国にとって重大なニュースではあったが、ホワイトハウス記者は「リビア攻撃」を選んだ。事実、その二日後に米軍はトリポリを爆撃した。シャウティンク・クエスチョンが最も的を射た質問の好例だ。

三大テレビの記者へは、シャウティンク・クエスチョンを放映すると必ず視聴者から「大統領にどのような質問するのは失礼だ」との苦情電話がかかってくる。オープンな米国社会でも、シャウティンク・クエスチョンは「行儀の悪い行為」なのだ。イラン・スキヤンダル発覚後は



4か月ぶりの記者会見——質問の3分の2はイラン・ニカラグア事件に集中した(3.19) 写真 AP-共同

まつした。ふたば(、五七二年共同通信入社、ニエーグリー特派員を経て、八四年からワシントン特派員)

当然ながら質問はこの事件に集中する。「シニルツ国務長官は辞任するのか」「ナンシー(大統領)夫人の進言に従って、リーガン首席補佐官を更迭するか」「武器代金をニカラグア反政府ゲリラ軍事援助に不正流用したのを知らなかったのか」——などなど。大統領の回答いかんでは、一面トップになる質問が相次いだ。ホワイトハウス側も、シャウティンク・クエスチョンに閉口、一時レーガン大統領を記者団から隔離するほど。今後もシャウティンク・クエスチョンから重大ニュースが飛び出すだろう。(三月二十五日記)

# 国鉄 新会社へ

## ワーキングプレス

部屋中に響く声だった。  
「なんで、こつちが全部やるんですか。もう、北海道の話は北海道でやるのが当然でしょう」

国鉄新会社のトップを切って、JR東日本、JR貨物が東京のホテルオークラで、JR北海道が札幌のグランドホテルでそれぞれ創立総会を開いた三月二十三日。国鉄本社二階にある『ときわクラブ』で、ふだん温厚な記者が珍しく声を荒らげている。

「国鉄の系列ホテルでなぜやらないんだ？」「ミエだよ、ミエ」とへらへら口をたたきながら、午後からの創立総会原稿の構想を練っていた各社の連中は、ガチャンと受話器をたたきつける音を聞いて、四月からの取材体制に思いをめぐらす次第となった。「しばらくは、どこでも同じようなやりとりがあるだろうなあ」と。もともと、当局でさえ、運輸省と国鉄のどちらがこの総会の広報を担当するか、で押しつけ合いをしていたが。

歴史的な分割・民営という一大改革とあって、この一年、国鉄を

担当する『ときわクラブ』は各社一人の体制が二人常駐になり、激しい取材合戦を展開してきた。

遊軍から送り込まれ、「官僚的発言はやめる、と公社に言ってもはじまらん」と嘆きながら駆けずり回っていた当初、安直にひらめいた記事がある。

「日本最古の記者クラブ『ときわ』消える」——現役の国鉄マンは「昭和一ケタ代にはもうあった」

## 広報も六分割現地主義

平井 鏡太郎

と言うが、最古かどうかも確認できないうまま、結局、思いつきは原稿にならず、『ときわ』は存続となった。

「民間にはなるが、私鉄より強い公共性を持つJRグループとして、地域住民に今まで以上の広報サービスをしていきたい」というのが国鉄側の要望だった。

とはいえ、現地と東京という従来の二元的広報は、新会社別に独

立、取材側も六分割されることになった。JR広報は「原則として現地主義」だ。

読売新聞の場合、昨年十月に三本社合同の会議を開き、これからは東京に情報が集中しなくなることを説明し、新旅客会社ごとの取材体制を整備しておくことを申し合わせた。JR六社は各自、独立した広報活動を行うから、これまで全国をカバーしていた『ときわ』

はJR東日本が主、『青灯クラブ』はJR西日本担当、と国鉄時代からの各現地クラブが地元JR会社のすべてをフォローすることに。昨年暮

れの余部鉄橋事故のような大事故が起きて、JR東日本に情報が逐次、報告されることはない。事故原因はJRの各本社が調査にあたるから、その社でしかわからない仕組みだ。

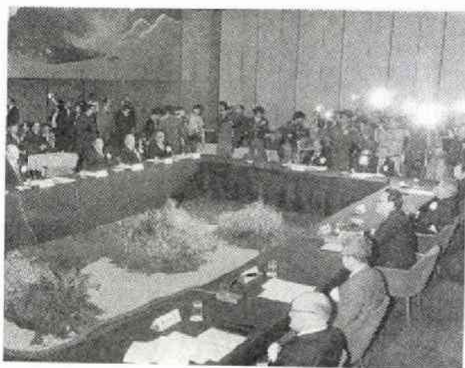
やっかいなのは、JR東海とJR西日本が運営する東海道・山陽新幹線だった。四月直前によく、両本社で広報するほか東京の運行本部でも対応することで調整

が。ついた。

国鉄改革は報道機関の取材体制をも大きく変える。酒に酔ったあるJR幹部が「これからは民間会社。どこにどんなニュースを流そうがこちらの自由だ」と言い放つたものだ。随そうとすれば、一層ファイトがわくのが記者の性（さが）。

国鉄最後のポスターのコピーに「北から南から、新しいJRの顔です」とある。当然、その素顔を紹介するのが、全国各社の担当記者の役目であるようだ。

ひらい きょうたろう（一九六九年読売新聞入社、浦和支局を経て社会部、八六年からときわクラブ担当）



ホテルオークラでのJR東日本の創立総会（3.23）  
写真 読売新聞

# プロ野球取材

# ワーキングプレス

プロ野球記者がネット裏で取材した時代はいまや昔。グラウンドに背を向けた暗いスタンド下の通路で、あるいは医務室の前にたむろし、「事件」を待つのが最近の野球記者の取材パターンになりつつある。「人工衛星記者」「ケガ番記者」などという「新種族」も誕生してきた。人気選手の周りをとり巻いているのが人工衛星で、選手のケガを見張っているのがケガ番、というわけだ。

かつてプロ野球記者は「ネタに困ったら長島、王を掛け」といわれ、実際、ONの動向を伝えるだけで読者を引きつけることができた。だからキャンプでもONの打撃練習には目をこらし、ホームランを何本打ったかなどメモに「正」の字をつけていく記者が目立ったものだ。ところが最近、こうしたキャンプ風景にはほとんどお目にかかれないう。正の字どころか、練習など見ない記者が圧倒的にふえてきているのだ。決して不まじめなのではない。ネット裏で悠長に練習を見ているだけでは、取材競争には勝てない

状況になっているからである。

ONのようなスーパースターが少なくなつたのがそのひとつ。どうしても数少ない話題の選手にターゲットがしぼられ取材が集中する。その典型が今年、ロッテから大騒ぎの末、中日にトレードされた落合の取材。中日の串間キャンプに常駐する記者は例年三〇〜四〇人なのが、今年は一気に五倍、一五〇人を超す記者が三冠王男を

これは異様な光景だった。

落合が姿を現すと、どつと周りをとり囲む。が、球団が設定する記者会見以外、落合はだんまりを決め込んでいるから始末に悪い。なにも聞かずただその周りをうろつく「人工衛星記者」が生まれるという次第である。

一方、巨人の宮崎キャンプは医務室の前が常ににぎやか。江川が一四〇の快速球を投げるより、どこかケガでもしてダウンする方が話題性があるという各社の判断から

## 「事件捜し」に全力投入

柏 英樹

目当てに押しかけた。

当然、現場は混乱する。厳しい取材規制に加え、落合がまた室内練習場にもつての秘密トレーニングなるものをはじめたからたまらない。記者たちは本球場での中日本隊の練習はそっちのけで、室内練習場の前でひたすら落合が現れるのを待つ。テントの中から聞こえてくる打球音を数え、その練習ぶりを推測する記者もいて、こ

で、「ケガ番記者」の誕生となる。ケガでなくともよい。昨年暮れに皆川コーチと西本の確執が表面化したように首脳陣と選手のケンカなどはもってこい。さらに写真週刊誌が選手のスキヤンダルを暴露すると「その対策は、罰金は？」とフロントに迫る仕事加わる。

投げた、打った、どの選手が好調といったキャンプ本来の取材からは遠い「事件捜し」に全力投入となるのだ。五十三年の江川入団騒動あたりから、こうした傾向が

強まってきた気がする。

球団の方もその点は心得ている。例えばサンチェの来日が遅れ、報道陣が騒ぎ出しそうな気配を見計らって、「母親が病気で……」との理由をひねり出し、発表する。だまし合いにも慣れねばならない。

いずれにしても選手のプライバシーはタブーというかつての不文律は消え、いまや素顔どころか下半身まで取材対象にされかねない時代。これを真実に近い報道と喜ぶべきか、ファンの夢を奪うものと憂うべきか。むずかしい。

かしわ ひでき（一九六四年報知新聞入社、アマスポーツ、オンラインピク取材などを経て、現在巨人担当）



マンマリの落合選手を見守る記者たち  
写真 報知新聞

## スタジオ訪問

九州朝日放送

モーニング・モーニング

## 日常性を素材に

葉があふれている。放送開始一年で、先行していた民放二局の朝ワイド（いづれもネット番組）を抜き、視聴率八%を超えるようになった秘密は、このあたりにありそうだ。

「いってきます」という日玉コーナーがある。一般の家庭にカメラを入れ、家族が起きて出勤するまでを、八分前後に編集したものだ。ナレーションも音楽も入らない。カメラもほとんど動かない。普通の家庭の朝をただ撮すだけだ。——そんなもの面白いはずがない。企画の段階で、局内から猛反対が出た。それが今や一番の目玉になっている。

「平凡だからこそナチュラル。特にめずらしい行事が放送されるわけではないが、なんでもない日常の風景から、さわやかな朝のかがやきが漂ってきます」

「茶の間とテレビが、一緒に朝の時間を過ごしているような暖かさを感じます」

「ほのぼのと、初々しく、アットホームな感じですよ」

「おだやかな気持ちで一日を始めることができます」

「司会の二人も、さわやかで親しみやすく、朝にふさわしい」

九州朝日放送が、昨年四月からスタートさせた朝のワイド番組「モーニング・モーニング」（月～金 7・15～8・25）に寄せられる手紙には、右のように「さわやか、ほのぼの、暖かい」という言

「何よりも身近な、ごく普通の家庭の表情を、さりげなく自然な形で登場させたのが大成功」「変なドラマより面白い」「どこの家庭でもくり返されている朝の短い時間が、こんなにも新鮮に思われるとは」。このコーナーの魅力は、寄せられた視聴者の感想が的確に物語っている。既存の番組作りの手法を捨てることから「モーニング」は始まった。

「他局と同じようなものを作ったのでは、ネット番組にはかないません。他局が追っかけるネタは完全に無視して、ローカルに徹することから出発しました」（湯川茂光プロデューサー）

「しゃべり過ぎない。リポーターは使

わない。珍しいものを追わない。それまでの番組制作のノウハウを捨てるのは大変でした」「今のテレビのあり方を反省して、ぜい肉を落としていって原点に戻ったようなものです」（江頭淳制作部長）

「一丁目一番地」も人気コーナーのひとつだ。なんでもない街角に一週間カメラをすえて、七分程度に編集する。「いってきます」同様に、ナレーションも音楽もリポーターも登場しない。

「大字につぼん」では、エリア内の普通の場所を紹介する。女性一人が歩き、出会った人と話をするだけだ。リポート形式ではない。名所も観光地も出てこない。

「朝を走る」は、自動車の助手席から前方を撮影したもの。テーマミュージックに乗せて、画面下に文字ニュースが流れる。録画なのだが、晴れ、雨、雪など放送日の天候に合わせてVTRを選んでいく。

「けさの美人」は、この番組では異色のコーナー。視聴者推薦の女性を、ちょっと凝った編集と音楽でイマ風に味付けして紹介している。これは二十代のディレクターが担当している。

このように、とりたてて驚くようなこともなく、情報が詰まっているわけでもないが、見る人はそれぞれのコーナーに引き込まれてしまう。映像が本来持つて

いる魅力のせいかもしれない。「良い映像は構図を決めて、カメラを固定して撮らなければ出来ません。最近ではカメラが小さくなったために動きながら撮ろうとする。この習性を直すのにレクチャーを何度もやりました」と江頭さんは言う。

小津安二郎ファンで、映画界入りを考えたこともあるとか。

落ちついた映像と淡々とした編集が、なんでもない日常や風景の持つ魅力を自然に引き出している。それに、後藤継丸キャスターとアシスタントの徳永令子さんの明るく軽快な会話が、番組にアクセントをつけている。

番組一回の放送で約五十人の人々が登場する。本社一階のロビーに張られた番組のポスターには「フツッの人が出るテレビ」とあった。（河野 聡）



ダジャレもとび出す楽しいおしゃべりも人気の秘密

# 紹介 合会

2日▽山高登氏(版画家)を囲む会(日本新聞インキ 長谷川勝三郎会員)▽R SK・USマスターズ観戦ツアー説明会(山陽放 川崎裕幸会員) 3日▽新聞協会報40周年パーティー(協会 林利隆会員) 4日▽トシエテン・カーシュ氏(スウェーデンのプレスオンブズマン)を囲む会(中村泰次会員)▽ニューメディア担当者連絡会(読売 山本和郎会員) 3日▽桜井英二郎さん(電通前広報室長)送別会(鈴田敦之会員) 5日▽在京岐阜県人懇談会(岐阜日 安藤一男会員) 6日▽亀

## ◆法人賛助会員

大島 壘



トヨタ自動車 岐阜県 県恵那郡出身。六二歳。東北大学法文学部卒。一九四八年トヨタ自工入社。その後トヨタ自販へ転籍、車両業務部長、取締役、常務取締役を務める。八二年トヨタ自動車常務取締役、昨年九月から取締役副社長。

## ◆特別賛助会員

鈴木 正孝



防衛庁 静岡市出身。四六歳。中央大学法学部卒。一九六六年防衛庁入庁。装備局通信課長、人事第二課長などを経て、本年一月から広報課長。

※三月一日付入会の法人賛助会員と特別賛助会員です。

ア・スポーツ賞表彰式・懇親会(児玉泰介(マラソン)、松下和幹(アーチェリー)他が受賞(テリースポーツ 近藤敬会員) 16日▽斎藤正躬氏を偲ぶ会(共同 村岡博人会員) 17日▽「小杉放菴画集」編集会議(日経 今関宗夫会員) 18日▽民間放送教育協会評議会・理事会(テレビ朝日 今井康一会員)▽ソ連・東欧記者会総会(NHK 吉川光会員)▽第4回人生劇場の宴(早大OB会(宮崎吉政会員) 19日▽民報協記者研修会「これからの政局と日本経済」渡辺美智雄衆院議員「国家秘密法案の問題点」永盛敦郎氏(弁護士)「あなたの取材を採点すると」野坂昭如氏ほか(朝日放 金田知会員)▽民間放送地方局懇談会(民放連 泉長人会員) 25日▽弥生会(共同経済部OB会(小林春雄会員)

## ○囲碁の会

三月の例会は二十八日(土)。二十三人の総対局数は四十二局。吉沢正也六段は前月と同じ四勝一敗、赤井良平五段は一月から六連勝、塚本初段は昨年十二月、今年一月に続いて三たび三勝一敗(通算九勝三敗で昇段間近?)久々に登場の山田健吉二段が三勝一敗、斎藤吉史三段四勝三敗、の各氏が今月の優秀賞。初参加の広田耕司初段(日経)は三勝二敗の好成績であった。



ソロビコフ駐日ソ連大使も出席——ソ連・東欧記者会総会 (3.18)

27日▽東京外語ロシヤ会(甲斐原文夫会員) 28日▽深尾須磨子を偲ぶ会(石川富子会員) (会員がクラブ施設を利用して行った主な会合(合です)三月の総回数は二〇回でした。)

新年度四月以降の例会日程は次のとおり。五月二日、五月二十三日、六月二十日(夏季大会)、七月二十五日、九月二十六日、十月三十一日、十一月二十一日、十二月二十六日(大軒杯争奪大会)。いずれも土曜日午後二時から。ご予約のうえ、多数おいで下さい。

クラブ賞推薦委員会(3:2 小会議室)

一月三十一日までに会員から推薦のあった候補六件について、それぞれ委員会としての意見を付して、選考委員会へ報告することにした。

出席 青木委員長。緒方、五味、疋田、村上、野崎の各委員。

第38回総務委員会(3:9 小会議室)

昭和六十二年事業計画案、同収支予算案を作成、また、昭和六十二年度日本記者クラブ賞選考委員会、第八期役員選出委員会を総務委員会のメンバーで構成することを承認し、いずれも理事会に上申することにした。

出席 渡辺委員長。細谷、犬養、吉原、山田、泉の各委員。新井理事長、中江、常盤両副理事長。

第119回理事会(3:9 大会議室)

一、昭和六十二年事業計画案ならびに同収支予算案を原案通り承認し、第29回総会にはかることになった。  
一、日本記者クラブ賞の内規に従い、総務委員でクラブ賞選考委員会を設置することを決定した。また従来通り、総務委員会をもって第八期役員選出委員会とすることを決定した。  
一、第29回総会(予算)を三月二十三日午

後三時、第30回総会(決算)を五月二十五日午後三時から行うことを決定した。

出席 新井理事長、中江、常盤両副理事長。渡辺(兼)、細谷、犬養、米、堀井、鈴木、都築、吉原、高瀬、山田、中根の各理事。白鳥監事。

第36回施設運営委員会(3:10 第2会議室)

辞書、雑誌類の購入について検討した。

出席 犬養委員長。後藤、和田、宮地、山崎、黒木の各委員。

第79回会報委員会(3:11 8階会議室)

三月号、記録版について意見交換の後、四月号の編集について協議した。

出席 深川委員長。林、井出、斎藤、安延の各委員。

第115回会員資格委員会(3:12 8階会議室)

四月一日付の会員入退会を審議し、理事会へ答申した。

出席 渡辺委員長。中川、小池、加藤、林、玉井、青木、桢邑、長竹の各委員。

第143回企画委員会(3:17 大会議室)

司会をした委員からの行事報告の後、四月のクラブゲストについて意見を交換した。



▼拙著『驕る日本人』の日本語訳がサイマル出版会から出ました。私の三冊目の日本語訳本です。前の二冊は『飽食日本』(サイマル)と『日本に何を学ぶのか』(勤草書房)。

今回はタイトルを見ればお分かりのように、内容は日本人にとって耳がいたい話ばかりです。しかし、日本人は、ヨソモノの批判に耳をかたむけてよく聞いてくれるので、遠慮なく書いたわけです。

日本とアジアの間には、教科書、靖国、貿易摩擦など難問が多い。この本が、それらの問題を解決するヒントとなれば幸いです。日本が、そういう矛盾を深刻に受けとめ正しい対策を講じて、国際化時代に適応していくことを信じています。

(シンガポール・南洋星洲連合早報特派員 陸培春)

▼『総合ジャーナリズム研究』に書きつづけた「都新聞史」は、第五十六回で終わりとなりました。戦時中に消えた「都新聞」の紙碑を建てるつもりで取りかかった仕事ですが、四百字詰め千七百枚もの原稿用紙を費しながら、まだ書き落とした部分が残っているような気持ちで、ペンをおいてからも落ちつきません。

一段落したところで、私からお願ひがあるのですが——日本プレスセンタービルのごとくに「都新聞社」ここにありき」の銘板をはめこんでいただけないでしょうか。会員の皆さまのご賛同を得られれば、これにまさる喜びはありません。

(社)東京社専務理事 土方正巳

出席 藤村委員長。阿部、山岸、友田、

広瀬、有賀、石丸、高野、久木、白井、武藤、木村、中川、三宅の各委員。

寄贈書

取材と報道 日本新聞協会

- 世界年鑑'87 共同通信社
- 時事年鑑'87 時事通信社
- 小事典 地中海 エッソ石油
- 目撃者 近藤紘一著 文芸春秋
- ACCJ 1987 DIRECTORY

在日米商工会議所



# 写真部

## 親のこころと子のこころ

写真 立浪基博 (東京新聞写真部)

トラは、風格に欠ける点で百獣の王たる地位をライオンに譲るが、もし両雄戦えばトラのほうが勝つだろうと、ものの本にある。そのトラに食われるより税金を納めるほうが痛いと思われたのは、昔話に出てくる中国の老女であった。

国家はこの痛みで成り立っている。痛みが強ければ強いほど、納税者は行政や財政のムダに思いをはせ、政治への参加意識を持つ。痛みが、政治を国民の身近に引き寄せる。「税痛」は民主主義の基盤といえることができる。

直接税にくらべて間接税は、痛みを感じないで納める税金である。中曽根さんは、いま以上の税痛を国民に課すのは忍びないという親心から、大型間接税を導入することにした。中曽根さんにしてみれば、写真のような騒ぎは「親のこころ子知らず」というほかない。

が、子にいわせると、その親心がうさぐさい。痛みを消すのは税金を取り易くするためではないか、イソップ物語とは逆に、ライオンにロバの皮をかぶせる策略ではないか、もし痛みのない税金が横行すれば、政府は国民にとって縁遠い存在になってしまう、と。

これが売上税の、最大の危険性である。

(林 芳典)

会 員 異 動 (昭和61年4月~62年3月)

会 員 種 別 月	プ レ ス 会 員									法人・個人 賛 助 会 員		特別 賛 助 会 員	全 会 員			
	法人	基本	個人 A	個人 B	個人 C	個人 D	名 譽	対 前 増	月 減	社	個人	合 計	対前月増減			
61. 4	146	633	581	69	247	393	16	—	—	77	230	76	223	2,245	—	—
5	146	633	580	68	253	404	16	0	+15	77	227	77	223	2,258	0	+13
6	146	632	579	67	252	405	16	0	-3	77	229	78	223	2,258	0	0
7	146	632	579	67	250	412	16	0	+5	77	230	78	223	2,264	0	+6
8	146	621	584	66	255	413	16	0	-1	77	232	76	223	2,263	0	-1
9	146	619	587	63	257	412	16	0	-1	77	233	76	223	2,263	0	0
10	146	618	592	62	256	420	16	0	+10	77	233	74	223	2,271	0	+8
11	146	619	600	63	259	420	16	0	+13	77	233	75	223	2,285	0	+14
12	146	619	598	65	260	422	16	0	+3	77	233	74	223	2,287	0	+2
62. 1	145	615	599	65	260	422	16	-1	-3	77	233	75	222	2,285	-1	-2
2	145	617	599	65	259	427	16	0	+6	77	233	75	222	2,291	0	+6
3	144	615	601	65	259	427	16	-1	0	77	233	75	221	2,291	-1	0

定期購読します

フォーリンアフェアーズ、USニュースも

四月から、「フォーリンアフェアーズ」「USニュース&ワールドリポート」「ニューズウィーク」(日本語版)の購読契約をいたしました。これまでの「タイム」「エコノミスト」「シェビゲル」「レクスプレス」などに加え、施設運営委員会で検討した結果、前記三誌を新たに定期購入することになりました。

また、フランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語、ロシア語、韓国語の辞書もそろえ、英和辞典も買い換えました。ご利用ください。

ご存知ですか——ご利用ください

☆クレジットカード クラブのレストランでは次のクレジットカードが利用できます。ダイナースクラブ、JCB、住友、ダイヤモンド、ユニオン、アメリカンエクスプレス、セゾン、日本信販。

☆ゲスト用メニュー 値段が入っている普通のメニューのほかに、値段のついていないゲスト用メニューもあります。レストランでお客をする場合などは、あらかじめボーイにお申しつけの上ご利用ください。

☆サンプルメニュー お一人単価三千円、四千元、五千元、六千元、七千元と五種類のパーティー用サンプルメニューがあります。季節や出席者数などで多少変更する場合がありますが、会合準備の際に参考にしてください。

クラブ訪問者

3/18 堀川肇日本外国特派員協会支配人 山田信義  
同副支配人・在日外国報道協会事務局長

展覧会の招待券 朝日新聞社から「大改造すむルブル美術館展」「堂本尚郎三十年展」「ボロフスキー展」平野光男会員(西武美術館)から「ナンシー派アール・ヌーヴオー展」の招待券をご恵贈いただきました。お礼申しあげます。

計報 鹿島茂男会員(日本工業新聞)が三日二十五日急性硬膜下血腫のため、中屋健一会員(個人D)が同日十八日心不全のため、青山与平会員(同)が四月三日じん不全のため逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

四月一日現在の会員状況 法人会員 一四四社 基本会員 六一四人 個人会員 一、三六五人 法人・個人賛助会員 七七社 二三四人 特別賛助会員 七五人 名誉会員 一六人 計 二二二社 二、三〇四人

四月の行事 (7日現在)

20日(月)午後3時30分~4時50分 タンポAN  
C議長記者会見  
21日(火)正午~午後2時 リン米農務長官昼食  
会

会報委員長 深川 誠

委員 林 利隆 井出新六 斎藤吉史 安延久夫  
連絡 長谷川 河野(事務局) 五〇三一二七二二